

夏に虫がライトの周りをよく飛んでいます、一体何故でしょうか。本来、虫は飛ぶときに月を目印に真っ直ぐ飛ぼうとします。しかし、月に向かうつもりが目の前にある強いライトの光に影響を受け、間違っただけで集まってしまっているのです。私たちの人生もこのようなこと多くあります。本来私たちが見るべきものは大きくて動きません。しかし、この地上にはそれよりも目立つ情報が沢山あるので、私たちはそれを本物だと信じその周りを回ってしまうのです。私たちは一時光るものではなく、いつも変わらないものに目を留め正しく決断しなくてはなりません。

人間の体「みからだ」(教会)の対比がここでは書かれています。

(1) 一体性 (同じからだに属している)

世の中の宗教は自己実現を叶えるためのプロセスをうたっています。しかし、自己実現のために教会があるとすると、教会は壊れていきます。聖書が言っているのは自己実現ではなく、一つのからだの目的達成です。人間は本来一つになるように造られているので、神様は教会という組織を作りました。意見の違う者同士が集まって、からだの再建という目的があるからぶつかるのです。だからこそ9節にあるように愛が基本なのです。

(2) 多様性 (一人一人異なった働きがある)

教会は多様性が分かる場所です。神様は、沢山の器官の中であなたという一人の存在を造りました。キリストのからだの一部ということは自分がからだのどの部分なのかを知ることが大切です。分かっていないと比較をします。足の役割を手がやろうとしたら10分も持ちません。体を支えるようには作られていないからです。私たちは神様にそれぞれの役割で造られ、ひとつのからだの中にあるのです。

(3) 調和 (愛による賜物の行使)

音楽の不協和音も何かの音が合わさると素晴らしい和音になる、それが神様の調和の方法です。社会にあるすべての被造物を見てもこのことが言えます。ところが今の社会は調和がありません。一体性は無くなり、多様性を認めているようで調和がない、これがポストモダンです。大事なことがそこにあるように見えて、真髄が無いのです。そこで聖書は言っています。『一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。(4節、5節)』

キリストの家族と愛し合うこと、それが教会の建てあげです。それを憚るものがプライドです。プライドとはあなたを防御しているものであり、指摘されて腹が立つことです。カインの捧げ物もそうでした。カインには相応しくない心があって、そこを指摘されたから腹が立ったのです。多くの場合、プライドは古傷に結びついていて矛にささ

ている剣です。ですから指摘された時、屈辱だと思い、刀を抜き相手を切ってしまうとします。十字架刑は全裸で吊るされ、自由を奪われ、排泄まで人に晒すという最大の屈辱の刑だと言われています。このようにイエス様が最大の屈辱を受けたのですから、クリスチャンは屈辱という言葉に結びつくプライドを捨てなければなりません。プライドは百害あって一利ないからです。

日本の社会は個というものを大切にしているように見せかけています。ですから分業制が多く互いの事を意識しない職場が多く、上手くいきません。何かかたまりと誰かの所為にし、チームだとは思っていないからです。それぞれ責任転嫁しあう環境が今の社会にはあります。しかし、教会は違います。一つの問題かたまりたらみんなで助け合って直します。一匹狼クリスチャンは必要ありません。聖書はこの一匹狼を山羊で表わしています。山羊は群れをなすことを嫌います。何故かという自分の思いを成し遂げたいからです。しかし、羊は自分が弱い存在であることを知っているので群れの中で1人の羊飼いのリードの元で生きようとするのです。教会は群れであり、それぞれ役割があります。この中で誰一人としてそのからだに属していない人はいません。人間のからだで不要だと思われるものは一つもないからです。神様は一人ひとりが高価で尊く、そのからだが目撃を果たす為に必要な存在だと言われています。だからこそすべてのことは9節にあるように『愛には偽りがあってはならない』ということなのです。

聖書はその人を無条件に愛せと言っているのではありません。イエス様は「わたしが間で手を繋ぐから繋ぎなさい」と言われているのです。十字架を中心に橋渡しされた隣人を愛するのです。すべてのことがキリストにあってです。例え、相手に苦々しい思いがあるとしても向き合うことが愛であり、向き合えば必ず祝福されるのです。クリスチャンはそこ向き合っていて和解決していくことが大切です。これが聖書の恵みです。悪魔はその人の役割に応じて、弱さもよく知っています。そして神様がしようとしている計画を壊そうとします。プライドを与え、そのプライドを強固にします。指摘しあうことで憎しみ合うようにさせます。しかし、聖書は良心と真理を伝えていきます。暴力に暴力で返すのではなく、和解せよと言われているのです。殴りかかる人を抱きしめて愛することが出来るのです。

まとめ

教会は自己実現の為にあるものではありません。しかし、神様の願いはそのひとつのからだか建てあげられあなたの存在が美しい存在に変わることです。結果あなたが願っていた願いがすべて整うでしょう。キリストにあって隣人を愛していきましょう。『愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。』必ずそこには恵みがあります。そのことを信じて行っていきましょう。